# 漁協の共済

2

JF共水連の
漁協役職員むけ機関誌
No.184
February 2016

特集 岩手県水産業における復興への取り組み
――東日本大震災を乗り越えて

JF共済

# 住み慣れた場所で最期まで（上）

（文：健康ライター・倉西隆男）

読者の皆さんは「在宅医療」という言葉をご存知でしょうか。その前に、病院で亡くなる日本人はどれ位いるでしょうか。統計によると、全体のだいたい8割の人が病院で亡くなっているそうです。筆者のまわりや新聞で有名人の訃報を読んでも、何かの病気を患い入退院を繰り返して病院で亡くなったという人が目に付きます。多くの人が長生きする時代になりましたから、病気ひとつしない元気な老人が、ある日「ぽっくり」逝くことが珍しく、むしろ高血圧や糖尿病にはじまって、脳卒中や心臓病、がんといった病気と付き合いながら、だんだん弱っていくというのが今のごく一般的な姿ではないでしょうか。

さて、前置きが長くなりましたが、「在宅医療」とは、医師や看護師が住みなれた自宅などを訪問し、最後までその人がその人らしく生きることを支えてくれる医療のことです。もし病院で亡くなることが、「本人らしい生き方」ならばそれでもいいと思います。しかし、そんなことはしたくない、自宅で穏やかに過ごしたいと思っているのにそうならない（たとえば、病院では時にたくさんのチューブにつながれて死んでいくことがある）とすれば、それはきっと幸せではないとは思いませんか。

24年前から栃木県小山市で「在宅医療」を全国に先駆けて行ってきた、「アスムス」理事長、医学博士の太田秀樹医師は、患者さんの自宅や介護施設等の療養先であっても、病院と遜色のない医療が提供できると話します。太田医師はこう断言します。

「病院は病気を治すところ。安らかに家で最期を迎えたいと望んでも、それができないのはおかしいのです」。勘違いしないでほしいのは、治る見込みがない人が家に帰れば治療は何もしないのかというと違うということです。具体的には末期のがんであれば痛みを和らげて苦痛を取り除き、息が乱れれば酸素吸入する器械で呼吸を楽にすることができます。

「在宅医療」はあくまでも、人の「生」を支えていく医療なのでしょう。生きている限り、誰もが「死」から逃れることはできません。しかし、それは結果であり、死の淵にいる身近な人や家族の延命を願わない人はいないはず。それより、本人の人生がまっとうできるかどうか。それを支えられるかどうかが問われます。

「在宅医療」には、人を元気にする力が備わっています。大切なことは人としての尊厳です。「人は老いても障害があっても、みんな対等にその人らしく生きる権利をもっているんですよ」と太田医師は話します。皆さんは自分がどう生きて、最期はどうありたいのか。このことを家族や周囲の人たちとよく話し合っておくことをおすすめします。

（写真左）太田先生の著書「家で天寿を全うする方法」（さくら舎）
（写真右）勇美記念財団「在宅医療　知っていますか？　家で最期まで療養したい人に」より（真ん中が太田先生）